

と輝く金色の背文字が目印です。実は、この背表紙の「浄土真宗聖典全書」の文字は、すべて親鸞聖人の筆です。それでは、親鸞聖人が「浄土真宗聖典全書」と、どこかにお書きになられていたかというところ、もちろんそんなことはありません。一文字ずつを、本派本願寺が所蔵しています親鸞聖人真筆のお聖教や名号から選んで組み合わせたものなのです。

「浄」「土」「真」「典」は『唯信鈔』、「宗」「聖」は『浄土三経往生文類』、「全」は『観無量寿経註』、「書」は「六字名号」の讃文からの文字です。私たちが親しむべき聖典の題字が、親鸞聖人の筆だというのは、何とも味わい深いことだと思います。

「浄土真宗聖典」の集大成

宗門においては、これまでに「浄土真宗聖典」として、原典版・註釈版・現代語版が編纂刊行されてきました。現在、これらの聖典は、浄土真宗の教義の根幹

を世に伝えるものとして重要な位置を占めています。『聖典全書』は、こうした「浄土真宗聖典シリーズ」の成果と精神を受け継ぎながら、新たな編纂方針にのっとり、「浄土真宗のすべての聖教を収め、高い史料性を保持しつつ、領解・伝道に活用できる聖典」を基本理念として編纂されました。『聖典全書』は、いわば「浄土真宗聖典」の集大成といえるでしょう。

『聖典全書』の主な内容

『聖典全書』は、全六巻、計百八十を超える聖教・資料を収録しています。内容は、大きく四つに分けることができます。それは以下のとおりです。

◇「三経七祖篇」(第一巻)

浄土三部経とその異訳の経典、並びに親鸞聖人に至るまで浄土真宗の教義を相伝された、インド・中国・日本の七高僧の論釈。

◇「宗祖篇」上(第二巻)・下(第三巻)

上巻は、『教行信証』をはじめ和讃や御消息、また名号・御影の讃銘に至るまで親鸞聖人の著作、及び『歎異抄』や先輩の書物。下巻は、親鸞聖人真筆の『観経註』『弥陀経註』や『西方指南抄』、源空(法然)聖人の御消息、及び親鸞聖人の加點本、延書等。

◇「相伝篇」上(第四巻)・下(第五巻)

上巻は、親鸞聖人の直弟、真仏、顕智両上人の聖教抜書、また本願寺第三代宗主覚如上人の著作や伝記、存覚上人の著作や自伝等。下巻は、第八代宗主蓮如上人の『正信偈大意』や『御文章』等の撰述、並びに『蓮如上人御一代記聞書』等の言行録や上人が敬重された典籍等。

◇「補遺篇」(第六巻)

前五巻を補完するための源空聖人の法語や伝記、初期真宗教団や本願寺の成立に関する史料及び門徒の記録、聖教目録

や系図等。

最新の研究をもとに

聖典の編纂の歴史は古く、宗門における大事業では、宝暦十一（一七六一）年の親鸞聖人五〇〇回大遠忌法要記念として明和二（一七六五）年に刊行された『真宗法要』が挙げられます。この『真宗法要』は、和語のお聖教三十九点の収録で、当時のご門主や学僧が関わり、印刷技術の発展も相まって、教学・伝道に大きな影響を与えました。また、すでに述べた「浄土真宗聖典シリーズ」は、多くの出版物に引用され、各種研修会の指定テキストとして活用されるなど、広く浸透しています。それでもなお、新たな編纂が必要とされるのはなぜでしょうか。お聖教を取り巻く環境は、書誌学（成立年代、筆跡、紙質、体裁などに関する学問）をはじめとした研究の進展や新たな資料の発見など、刻々と変化しています。それら研究の進展に伴い、『聖典

全書』では、親鸞聖人、蓮如上人の筆跡など最新の研究成果を盛り込み、とくに親鸞聖人の真筆は近年発見されたものも含めて網羅しています。つまり、新たな聖典が編纂されることは、時代の要請ともいえることなのです。

原本情報の収集

私たちは「学界等で資料的評価をうけることのできる善本（すぐれた本）を翻刻する」ことを指針とし、常に学界の動



聖教・資料の原本調査の様子

静を見据えながら編纂を進めました。本文を翻刻する際に、もともなった聖教・資料の原本（書写本や刊本）は、そのすべてが貴重かつ重要なものです。しかし、各地に点在する資料の情報は、今なおすべてが明らかになっていないとはいえません。私たちは、先人が積み上げてきた成果によりながら、慎重に調査をかさね、全国各地をまわり画像と情報を一ひとつ収集してきました。その中には、かつては公開されていなかったもの、行方がわからなくなっていたものもあります。こうした活動の蓄積が、『聖典全書』の編纂を支える要因の一つであるといえます。

今だからこそ実現

聖典編纂の基底ともいえる原本調査は、私たちの力だけでは、決してできることではありませんでした。それは、聖典の編纂に欠くことのできない貴重な聖教・資料をご提供いただいた所蔵者のご

唯信鈔文意

照禪師とまふす聖人の御釋なり。この和尚おは
法道和尚と、慈覺大師はのたまへり。また『傳』に
は廬山の彌陀和尚ともまふす、淨業和尚ともま
ふす。唐朝の光明寺の善導和尚の化身なり、こ
のゆへに後善導とまふすなり。

「彼佛因中立弘誓」 聞名念我總迎來
不簡貧窮將富貴 不簡下智與高才
不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深
但使廻心多念佛 能令瓦礫變成金（聖書法）
「彼佛因中立弘誓」このころは、「彼」はかのと

六九二

證護念のありさまにてあきらかなり。證護
念の御ころは、『大經』にもあらわれたり。すで
に稱名の本願は選擇の正因たること、悲願に
あらわれたり。この文のころはおもふほどはま
ふさず。これにておしはからせたまふべし。この
文は、後善導法照禪師とまふす聖人の御釋也。
この和尚おは法道和尚と、慈覺大師はのたまへ
り。また『傳』には廬山の彌陀和尚ともまふす、
淨業和尚ともまふす。唐朝の光明寺の善導和
尚の化身なり、このゆへに後善導とまふすなり。
「彼佛因中立弘誓」 聞名念我總迎來
不簡貧窮將富貴 不簡下智與高才
不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深
但使廻心多念佛 能令瓦礫變成金（聖書法）
「彼佛因中立弘誓」このころは、「彼」はかのと

2-626

段組箇所の例（第二卷 宗祖篇上『唯信鈔文意』）

好意、ご支援があつてはじめて可能となつたものです。また、それは現代だけの話ではありません。記録だけが残り、すでに失われている聖教・資料があることを思えば、聖典の編纂に際して、貴重な原本が、今日に伝わっていること、そのものが希有な事態であると考えるべきで

しょう。その事實は、そのまま、どの時代にも、聖教・資料を後世に伝えなければならぬと尽力された方々の存在があったことを示しています。このように、浄土真宗の歴史の中で、聖教・資料に注がれてきた力の結晶により、聖典の編纂が成り立っているのです。『聖典全書』

は、幾多の時代を経て伝えられてきた聖教・資料の保存・管理・公開、調査研究の積み重ね、諸条件が整った今だからこそ実現した聖典であるといえるでしょう。

原本から一字ずつ

聖典の本文は、すでに刊行されたものがあれば、それをそのまま使用すれば良いのではないかと、という考えがあるかもしれません。しかし、すでに述べたように研究の進展、学界の動静により、私たちは、本文のもとになる原本から選定しなおしました。基本姿勢として、その原本画像を注意深く確認しながら、一字ずつ起こし、多くの時間と労力を費やして繰り返し校正をかけています。当然のことではありますが、その姿勢はお聖教の一字、一字を決しておろそかにしない、ということでもあります。その成果は、『聖典全書』の本文をはじめ、校異や聖教解説など随所に盛り込まれてい

ます。

拝読のための工夫

これら六巻それぞれには、拝読の便を考慮して、様々な工夫を凝らしました。

たとえば段組です。右の段組箇所のように、ある一つのお聖教について、本文の異なる系統が伝わっている場合に、それぞれの系統の本文を上下段、あるいは上中下段に配置して対照の便を図っています。こうすることで、本文の相異が一目瞭然となります。次に上欄や下欄に付した頁数です。これは、親鸞聖人の『教行信証』とその註釈書である『六要鈔』のような関連するものが、註釈書から註釈元のお聖教で確認できるように、該当する頁を付したものです。また、『註釈版聖典』に収録されているものには、やはり、連携して確認できるように、その頁数を付しました。他にも、本文理解の補助資料として、巻末に各巻の特性に応じた付録を収録しています。

なお、『聖典全書』のサイズは、携帯の機会の多いことを考慮した結果、変形B6判としました。

正確な聖典に基づいた伝道を

「自信教人信」の道を歩ませてください。お互いにとって、正確な聖典のご文に基づいてこそ、「阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しくわかりやすく伝える」ことにつながります。この『浄土真宗聖典全書』を最大限に活用していただくことを念願しています。

問い合わせは総合研究所（075-371-9244）まで。